視覚的中国語語順の文構造モデルをめぐって
―日本語の文の分類を踏まえつつ―

（『言語の研究』１号
2015年７月）

劉　志偉

はじめに

劉（2008）では、中国語が屈折のない言語であるという最大の特徴に着目し、中国語の語順の視覚的な学習方法として、次の文構造モデル（図１）を提案した。



図１　視覚的中国語語順学習用文構造モデル（劉 2008：15）

これは、中国語の語順を順番の決まった大きさの異なる箱の並びに見立て、これらの箱に、個々の文成分を構成する単語・フレーズ・シンプルセンテンスを書いたカードを入れていくイメージで語順を習得するという学習法のことである。また、中国語の「文」を「単文」と「複文」とに二分し、文構造モデルの使用方法により「くさり型」「箱入れ型」「複合型」の３つのタイプに分けた。本稿では劉（2008）において詳述できなかった下記２点について詳細を示す。

（イ）文構造モデルにおける一語文（独立語文）の扱い方。

（ロ）日本語の構文と提案した文構造モデルとの関係[(1)]。

また、この視覚的中国語語順学習用文構造モデルの具体的な応用についても説明を行う。

１．視覚的中国語語順学習用文構造モデルの目指すものとその特徴

視覚的中国語語順学習用文構造モデルは、日本語を母語とする中国語学習者が、分かりやすくかつ効率的に中国語の語順を学習することを目的としている。そのため以下の３点を念頭に置いている。

（ａ）分かりやすさ。語学は視覚的に示すと理解しやすいことから、視覚的学習構造を提案した。また、文法術語も従来のものにとらわれず、分かりやすく説明した。「文」のよう

な難解な概念についても深入りせずに理解してもらうことを心がけ[2]、文構造モデルに適した用語や説明を体系化した[3]。

（b）効率的な学習。視覚的中国語語順学習用文構造モデルを手がかりに個々の学習ポイントの位置づけを把握し、全体像を把握することによって効率よく体系的な習得ができる[4]。

（c）日本語の構文特徴の活用。

2．日本語の文の種類

筆者の考案した文構造モデルは、日本語を母語とする中国語学習者を対象とするものである。そのため、日本語の文との関係を示すことが必要である。ここで、佐伯・山内（1983）に基づき、従来の様々な立場から捉えた日本語の文の種類の体系をまとめておきたい。佐伯・山内（1983：66－70）に従えば、日本語の文の区分基準は大きく「性質（文が全体として担っている意味の類型的あり方）」と「構造（文の内的構造）」とに分けられる。前者の「性質」についてはさらに「叙述の形式」と「構造的な違い＋伝達上の機能」とに区分される。「構造」には「文を構成する中核成分のあり方」と「節の含まれ方」という下位分類がある。まず、その詳細の確認と検討を行う。

2．1 「性質（文が全体として担っている意味の類型的あり方）」による分類

2．1．1 「叙述の形式」による分類

「平叙文」「疑問文」「命令文[5]」「感嘆文」の四種類に分類される。佐伯・山内（1983）には具体例がないが、以下のようなものが挙げられよう。

（1）彼の犬が大きい。〈平叙文〉

（2）彼の犬は大きいですか。〈疑問文〉

（3）早く大きくなれ。〈命令文〉

（4）なんて大きい犬なんだ。〈感嘆文〉

この分類はもともと学校文法で教えられる英文法にならったものであり、類別が叙述形式に明確に反映されない日本語には不向きとされている（佐伯・山内1983：69）。

2．1．2 「構造的な違い＋伝達上の機能」による分類

佐伯・山内（1983）による「構造的な違いをも考慮に入れ、伝達上の機能といった観点からの文分類の試案」であり、独立語文と述語文とに二分されている。

独立語文に関しては、聞き手の存在の有無を前提とするか否かによってさらに「表出（聞き手の存在を前提としない）独立語文」と「伝達（聞き手の存在を前提とする）独立語文」とに分けられている。

（5）アーアー！（佐伯・山内1983：69）〈詠嘆、表出独立語文〉

（6）火事！（佐伯・山内1983：69）〈驚き、表出独立語文〉

（7）花子！（佐伯・山内1983：69）〈呼びかけ、伝達独立語文〉

（8）ハイ！（佐伯・山内1983：69）〈応答、伝達独立語文〉

しかし、この分類にはいくつかの問題点があると考えられる。例えば、驚きを表す「火事！」が聞き手の存在を前提としない「表出独立語文」と区分されているが、聞き手に「火事」という事態を伝えるときの「火事！」は明らかに聞き手の存在を意識した場面であろう。また、呼びかけの「花子！」は聞き手の存在を前提とする「伝達独立語文」の例として挙げられているが、彼氏が思いにふけながら花子の顔写真をみて「花子！」と独り言を発する場面は必ずしも聞き手の存在を意識したものとは言い切れないであろう。

一方、述語文は、主語になることのできる人称、文末に生起しうる文法カテゴリーの種類によって「表出型」「訴え型」「演述型」に分けられる。「演述型」にはさらに「状況描写文」と「判断文」とがある。

（9）（僕は）今年こそ勉強するぞ。（佐伯・山内1983：70）〈意志、自称詞のみ、表出型〉

（10）（私は）彼に会いたい。（佐伯・山内1983：70）〈感情・感覚、自称詞のみ、表出型〉

（11）（君は）こちらへ来い。（佐伯・山内1983：70）〈命令、対称詞のみ、訴え型〉

（12）あなたも行きませんか。（佐伯・山内1983：70）〈勧誘、対称詞のみ、訴え型〉

（13）昔々ある所にお爺さんとお婆さんが居ました。（佐伯・山内1983：70）〈現象文、他称詞のみ、演述型－状況描写文〉

（14）雨が降っている。（佐伯・山内1983：70）〈現象文、他称詞のみ、演述型－状況描写文〉

（15）私はたいそううれしかった。（佐伯・山内1983：70）〈解説・判断、自称詞、演述型－判断文〉

（16）君は丈夫だねえ。（佐伯・山内1983：70）〈解説・判断、対称詞、演述型－判断文〉

（17）本会の評議員には彼が選ばれた。（佐伯・山内1983：70）〈解説・判断、他称詞、演述型－判断文〉

述語文に関しても問題がないわけではない。「演述型」の下位分類である「判断文」の例として挙げられている（15)「私はたいそううれしかった。」のような文は、「表出型」との区別が明瞭ではなく、人称や感情を表す意味等では重なっている面もあろう。

2．2 「構造（文の内的構造)」による分類

この点に関して、既出の部分で筆者は意味を中心とした文の分類に限界性があるという立場を取っており、本稿で提示する文構造モデルは意味による学習ではないことから、続いて「構造（文の内的構造)」による分類を参照していきたい。

2．2．1 「文を構成する中核成分のあり方」分類

「性質（文が全体として担っている意味の類型的あり方)」は、述語とそれに対する成分といった分析や総合の過程の有無によって「独立語文」と「述語文」とに分けられる。「独立語文」は文を構成する語の性質から以下のような例が挙がっている。

（18）マアー！（佐伯・山内1983：69）〈無分化的独立語文〉

（19）ハイ！（佐伯・山内1983：69）〈無分化的独立語文〉

（20）火事！（佐伯・山内1983：69）〈分化的独立語文〉

（21）花子！（佐伯・山内1983：69）〈分化的独立語文〉

これに対し、「述語文」はさらに述語の品詞の違いによって「動詞文」「形容詞文」「名詞文」に再分類される。

（22）花子が太郎に叱られた。（佐伯・山内1983：68）〈動詞文〉

（23）雨が降っている。（佐伯・山内1983：68）〈動詞文〉

（24）彼女はとても美しい。（佐伯・山内1983：68）〈形容詞文〉

（25）この部屋は静かだ。（佐伯・山内1983：68）〈形容詞文〉

（26）山田は文法学者だ。（佐伯・山内1983：68）〈名詞文〉

（27）僕は花子さんと友達です。（佐伯・山内1983：68）〈名詞文〉

しかし、この分類には、文構造モデルの階層的な関係[(6)]を示すことができないという欠点がある。

2.2.2 「節の含まれ方」分類

本稿では、日本語母語話者が必ずしも論理的に理解していなくても、容易にイメージできること、日中両言語を共通して捉えられることの二点から、上述の日本語の諸分類のうち、文構造モデルの階層的な特徴に適合した「節の含まれ方」による分類を援用したい。ただし、「節」の定義を含めて様々な違いがあること、また学習用の文構造モデルという観点から、一文の中での文構造モデルの使用回数を軸にしていること、の二点を予め断っておきたい。

佐伯・山内（1983）に取り上げられている「節の含まれ方」の分類は、まず、「節」が一つの場合と二つ以上の場合によってそれぞれ「ひとえ文」と「あわせ文」とに区分される。「ひとえ文」には次のような例文が挙げられている。

（28）私は学生です。（佐伯・山内1983：67）〈ひとえ文－1〉

（29）春が来た。（佐伯・山内1983：67）〈ひとえ文－2〉

一方、「あわせ文」はさらに節同士が対等関係と従属の関係との違いにより、「重文」と「複文」に分けられている。以下の具体例が挙げられている。

（30）花も咲くし、鳥も鳴く。（佐伯・山内1983：67）〈重文－1〉

（31）春は来たが、花は咲かない。（佐伯・山内1983：67）〈重文－2〉

（32）心の優しい人は皆に好かれる。（佐伯・山内1983：67）〈複文－1〉

（33）我々は彼がやって来るのを待っていた。（佐伯・山内1983：67）〈複文－2〉

（34）参加者は、主催者が予想したほど多くなかった。（佐伯・山内1983：67）〈複文－3〉

（35）風呂に入っている時、彼から電話があった。（佐伯・山内1983：67）〈複文－4〉

（36）雨が降ったので、湿度が高くなった。（佐伯・山内1983：67）〈複文－5〉

本稿においては「単文」「複文」「重文」といった定義にゆれのある用語を用いない。代わりに視覚的に学習するという最大の特徴に立脚し、文構造モデルの使用回数を手がかりに「節の含まれ

方」との対応関係を分類として利用する（表１）。その理由及び使用については次節で詳述したい。

表１　一文の中での文構造モデルの使用回数による文の分類

日本語	節の含まれ方 （佐伯・山内1983による）	文構造モデル	
		型	使用回数（分類）
文の分類	独立語文	型内／型外	不使用が可能（「一語文」）
	ひとえ文	フィット型	１回使用（「一回文」）
	複文（１・２・３・４）（従属関係）	箱入れ型（マトリョーシカ的）	
	重文（１・２）（対等関係）	鎖型（線状的）	２回以上の使用（「多回文」）
	複文（５）（従属関係）		
	ひとえ文・複文・重文等による複合体	複合型	

３．文構造モデルを用いた実際の応用

視覚的に語順を示すという目的のもと、用例とともに中国語語順学習用文構造モデルの実際の使用方法を図示してゆく（添付資料も参照されたい）。また、中国語の特徴的な構文を表１の体系にあてはめることも試みたい。まず日本語の文を「一語文」とそれ以外とに区分する。「一語文」以外はさらに一文の中での文構造モデルの使用回数によって「**一回文**（１回使用）」と「**多回文**（２回以上の使用[(7)]）」とに分ける。

３．１　一語文と文構造モデル

「一語文」は、その「一語」から他の何らかの文成分への展開が可能か否かによって型内と型外とに分けられる。

３．１．１　型外

他の何らかの文成分で展開させることができない場合は、型外に区分される。文構造モデルを使用せず、「一語文」が文構造モデルの外に位置することを意味する。

（37）アー！（詠嘆）【図２】

（38）うん･･･（応答）【図２】

３．１．２　型内

その「一語」が文成分の一つであり、他の文成分への展開の可能性を含んでいる場合は型内とされる。

（39）火事！（驚き）【図３】

（40）中嶋！（呼びかけ）【図３】

3．2　一回文

表1に示した通り、佐伯・山内（1983）の「ひとえ文」と〈複文の1－4〉を「一回文」とする。「ひとえ文」はフィット型に相当する。これに対して、〈複文の1－4〉は「シンプルセンテンス」を含む箇所が文構造モデルの各箇所の「文成分」の箱に入るような形に因んで「箱入れ型」（「マトリョーシカ的」）と称する。ここでいう「シンプルセンテンス」とは[8]、文を構成する個々の成分のうち、用言型述語をひとつ有し、その箇所を言い切りにすれば「ひとえ文」になり得る存在のことである。

3．2．1　一回文（フィット型）

佐伯・山内（1983）に取り上げられている〈ひとえ文〉はフィット型に区分される。

（41）私は学生です。（用例28再掲）【図4】

（42）春が来た。（用例29再掲）。【図5】

しかし、（41）と同じ構造でも次の例文のように、文構造モデルで可視化した場合、述語成分に相当するものがない場合については注意を要する。これは中国語では年齢や時刻・曜日を表す際に判断動詞を用いないという構文特徴によるものである。

（43）いまはちょうど八時です。【図6】

3．2．2　一回文（箱入れ型）

佐伯・山内（1983）の複文〈1－4〉はそれぞれシンプルセンテンス（下線）が含まれていることから箱入れ型に区分する。

（44）心の優しい人は皆に好かれる。（用例32再掲）【図7】

（45）我々は彼がやって来るのを待っている。（用例33修正[9]）【図8】

（46）参加者は、主催者が予想したほど多くなかった。（用例34再掲）【図9】

（47）風呂に入っている時、彼から電話があった。（用例35再掲）【図10】

このほか、中国語教育ではよく取り上げられる下記のような「主述述語文」についても箱入れ型に区分する[10]。

（48）象は鼻が長い。【図11】

3．3　多回文（鎖型を例に）

ここでは、佐伯・山内（1983）の〈複文の5〉と〈重文の1－2〉を合わせて「多回文[11]」とする。そして〈複文－5〉と〈重文1－2〉のどちらも文構造モデルを鎖のように2回以上使用することから「鎖型」に区分する。佐伯・山内（1983）は、節の関係が対等関係なのか従属関係なのかによって「重文」と「複文」とに分類を行っている。しかし、〈複文－5〉は因果という意味からして、〈重文－2〉の逆接のように「線状的」関係と見なすこともできるのである。

（49）花も咲くし、鳥も鳴く。（用例30再掲、並列）【図12】

（50）春は来たが、花は咲かない。（用例31再掲、逆接）【図13】

（51）雨が降ったので、湿度が高くなった。（用例36再掲、因果）【図14】

このほか、線状型には中国語では様態補語と呼ばれるものも含まれ、日本語を母語とする学習者にとって馴染みの薄い構文である。例えば、

（52）歩けないくらいお酒を飲んだ。【図15】

という日本語の文は、中国語にする時に、「お酒を飲んだ」と「（飲んだ結果として）歩けないという状態」の二つの意味要素を一つの文にまとめる必要がある。この構文では同じ動詞述語を有し、両者をまとめる接着剤として“得”が用いられていることが特徴として挙げられる。図15の通り、これも線状型の一つとして見なすことができるのである。

4．使用上の注意点

4．1　連接語

日本語における接続詞の役割は、中国語では接続詞と副詞の一部とが担っている。本稿で提案した視覚的中国語語順学習用文構造モデルを使用するに際しては、「連接語」という概念を提示しておきたい。連接語とは、文構造モデルをつなげるためのいわば接着剤的な存在であり、接続詞と副詞の一部とが含まれている。接続詞は文字の通り、接続の役割があるため、文構造モデルの外（隙間）に位置するものと見なされる。一方、副詞は基本的に視覚的中国語語順学習用文構造モデルの位置Ｂに置かれる。

4．2　二つに限定して説明を行う。

文構造モデル同士の接続機能は連接語が担っている[12]。連接語とは、接続詞と副詞（の一部）の組み合わせによって構成されている[13]。“无**论**……**还**是……都……”（～であろうと、であろうと、すべて～）のように連接語が三つの組み合わせも、数は少ないながらも存在するが、連接語が二つの場合が主である[14]。連接語の体系については別稿に譲るが、ここでは連接語の位置関係を示すため、連接語が二つの場合に限定して取り上げる。

4．2．1　副詞と副詞（緊縮文）

「～するとすぐ～」という文は中国語では“一……，就……”のように二つの副詞の組み合わせで訳される。中国語では「緊縮文」と呼ばれる。副詞は、位置Ｂに置かれる。

（53）彼は横になったやいなや眠りについた（寝付いた）。【図16】

4．2．2　接続詞と副詞／副詞と接続詞

接続詞と副詞の組み合わせには「接続詞＋副詞」と「副詞＋接続詞」があるが、ここでは前者を例に示す。例えば、「もし～なら、（それでは）～」は中国語では“如果……（的**话**），就……”と訳される。“如果……（的**话**）”は接続詞であり、文構造モデルの外（隙間）に位置する。これに対し、副詞の“就”は位置Ｂに置かれる。

（54）明日新宿に来られるのなら一緒に買い物に行こう（買い物をしよう）。【図17】

４．２．３　接続詞と接続詞

接続詞同士の組み合わせについては“不但……而且……”を例に考えたい。直訳では日本語の「～だけでなく、しかも～」という構文に相当する。（55）（56）の下線部を比較すると分かるように、「彼（は）」に対する述部が異なる。

（55）月曜日は彼は授業に出ないといけないし、私も用事があって･･･。（彼が授業があるだけでなく、私も用事がある。）【図18】

（56）土曜日、彼は昼間に授業があって、さらに夜にはアルバイトもしないといけない。（彼は昼間に授業があるだけでなく、夜もアルバイトがある。）【図19】

中国語では両者ともに“不但……而且……”という構文を用いるため、そのニュアンスの差を示すには、“不但”と主語の位置関係の違いによって実現されるのである。“不但”が「彼」の前にある（55）は“他要上**课**”のみ統括しているのに対し、“不但”が「彼」の後にくる（56）は“白天要上**课**，而且**还**要在晚上打工。”の全体にかかっているのである。

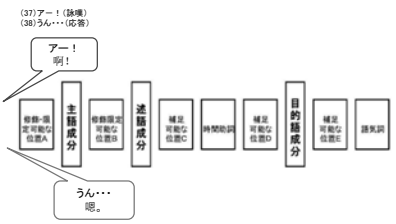
５．期待される効果－結びにかえて－

本稿では、「節の含まれ方」という分類方法を手がかりに、筆者の提案する視覚的中国語語順学習用文構造モデルの使用回数と日本語の文との対応関係を述べた。この学習法の目的は、全体像を把握した上で、日本語を利用しつつ、分かりやすくかつ効率的に中国語の語順をマスターすることにある。また、日本語を母語とする学習者にとって馴染みの薄い構文についてもこの文構造モデルを応用して理解する方法を示した。難解な中国語の文を理解する際に、本構造モデルの利用が読解の一助になることも期待できる。

ただし、筆者の提案した文構造モデルを用いた学習方法を実際に広げてゆくためには、細かい箇所にも説明を加えた教材を作成する必要性があろう。また、本構造モデルを用いることの有効性についての更なる検証も今後の課題としたい。

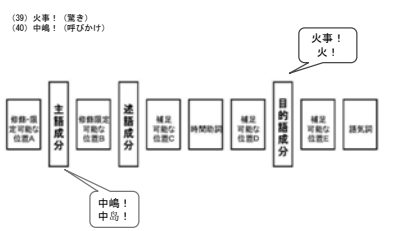
付記

本稿は、中国語教育学会2014年度第５回研究会（2015年１月24日　於日本大学）における口頭発表をまとめたものである。加藤晴子先生、佐藤富士雄先生、豊嶋裕子先生、平井和之先生、丸尾誠先生、村上公一先生（五十音順）諸先生から貴重なご意見を頂いた。ここに記して深く御礼を申し上げる。なお、本稿の執筆にあたり、ご協力下さった中嶋徹氏にも感謝の意を表す。



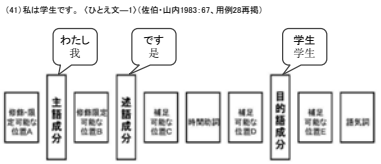
(37) 啊！
(38) 嗯。

図2 一語文（型外）



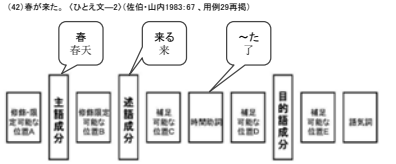
(39) 火！
(40) 中岛！

図3 一語文（型内）



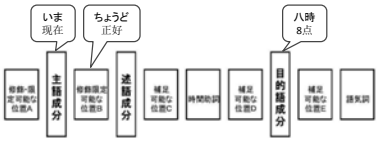
(41) 我是学生。

図4 一回文（フィット型1）



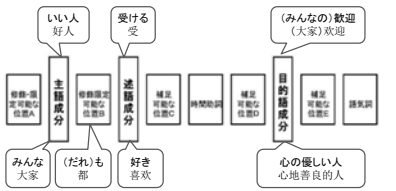
(42) 春天来了。

図5 一回文（フィット型2）



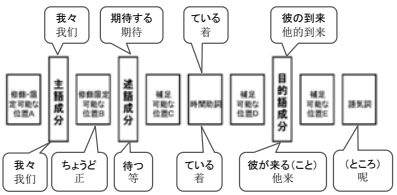
(43) 现在正好８点。

図6 一回文（フィット型3）



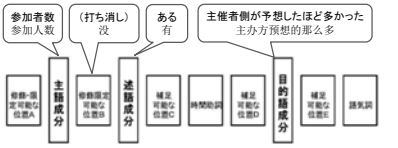
(44) 好人受(大家)欢迎。
大家都喜欢心地善良的人。

図7 一回文（箱入れ型1）



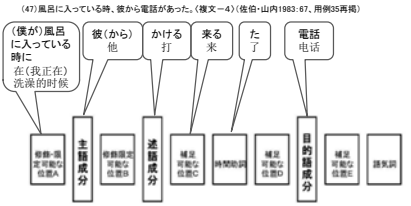
(45) 我们期待着他的到来。
我们正等着他来呢。

図8 一回文(箱入れ型2)



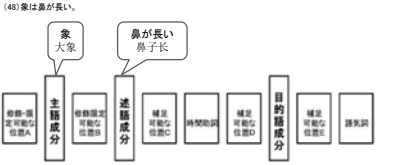
(46) 参加人数没有主办方预想的那么多。

図9 一回文(箱入れ型3)



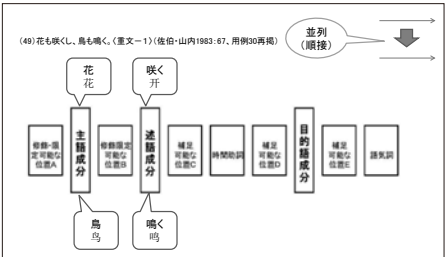
(47) 在(我正在)洗澡的时候,他打来了电话。

図10 一回文(箱入れ型4)



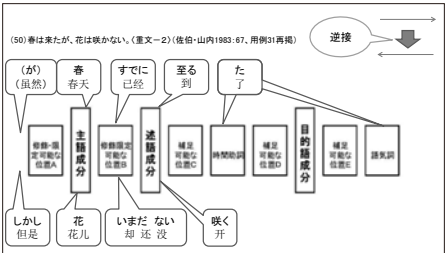
(48) 大象鼻子长。

図11 一回文(箱入れ型5)



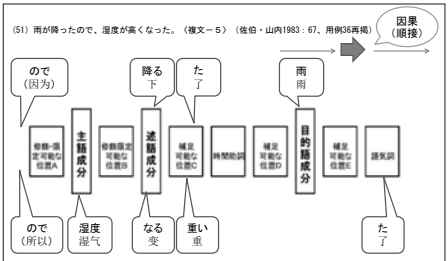
(49) 花开鸟鸣。

図12 多回文(鎖型1)



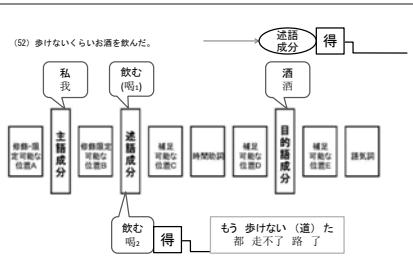
(50) (虽然)春天已经到了,但是花儿却还没开。
春已至,花未开。

図13 多回文(鎖型2)



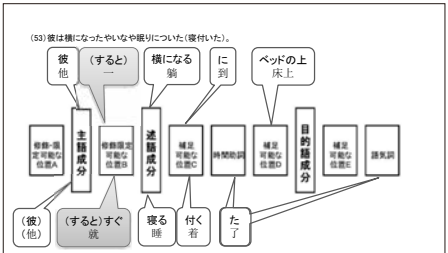
（51）（因为）下了雨，（所以）湿气变重了。

図14　多回文（鎖型3）



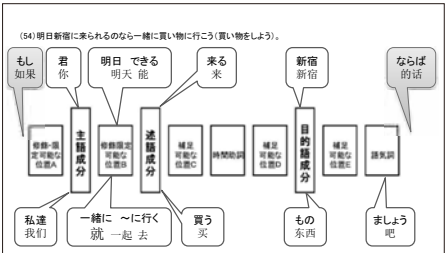
（52）我（喝1）酒喝2得都走不了路了。

図15　多回文（鎖型4）



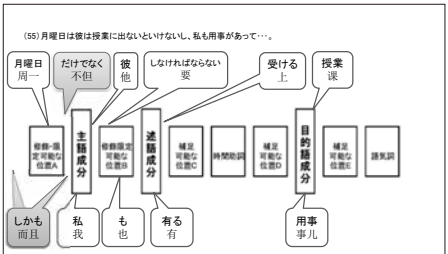
（53）他一躺到床上就睡着了。

図16　連接語（“一……，就……”）



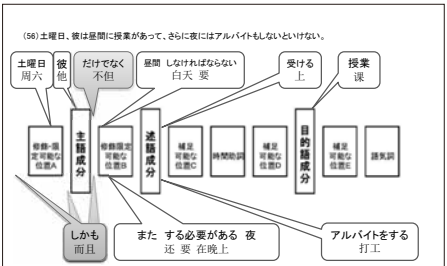
（54）如果你明天能来新宿的话，我们就一起去买东西吧！

図17　連接語（“如果……（的话），就……”）



（55）周一不但他要上课，而且我也有事儿。（下次吧！）

図18　連接語（“不但……而且……”１）



（56）周六他不但白天要上课，而且还要在晚上打工。

図19　連接語（“不但……而且……”２）

注

（1）劉（2008）では日本語の構文の特徴を最大限に活用することを指針としていた。

（2）例えば、「アスペクトの助詞」という用語を避け、「時間助詞」を用いた。なお、劉（2008）にあった「単文」「複文」については本稿では用いないこととする。

（3）中国国内の教育文法の用語及びその文法説明の和訳版ともいうべき現行の説明方法では視覚的に中国語の語順を提示するのは困難である。具体的には、兼語句（使役構文を含む）、受身構文、把構文、連動文、有構文、名詞述語文、存現文といった構文や、構造助詞「的・地・得」、助動詞類と接続詞類の扱い方、品詞の兼類現象、一部の結果補語と介詞との整合性、使役のマーカーと受身のマーカーの説明との整合性等が現行の中国語教育文法の説明に関する問題点として挙げられる。筆者はこれまで文構造モデルの説明に適した文法カテゴリの簡略化を図りながら、以下の文法のカテゴリについて考察を行ってきた。具体的には、1）「名詞述語文」を設けないこと（劉2011a） 2）「連動文」を設けないこと（渡邉・劉2015） 3）日本語母語話者にとって馴染みの薄い「把構文」を「名詞＋助詞」のセットの1つとして捉え、介詞補語との位置関係を明らかにしたこと（劉2012b） 4）従来「視覚的」が無理であった「助動詞」（助（添）意詞）の扱い方を再定義したこと（～つもりだ：計画・打算）（劉2011a） 5）日本語を利用するために、「名詞＋助詞」をセットとして学習することを提案したこと（渡邉・劉2015） 6）言語現象としての「結果補語と介詞補語」の矛盾を解消したこと（劉2008、渡邉・劉2015） 7）使役のマーカーが動詞であるのに対し、受身のマーカーは「介詞」といった従来の矛盾点を合理化したこと（劉2011b、2013） 8）Bケースの法則（劉2011a） などが挙げられる。

（4）現在のテキストは勿論、教育現場全体が頻出のポイントを示しておけばよいという風潮にあり、体系的な理解という発想が欠けているように思われる。その結果、学習者は個々のポイントをマスターできても、それらを全体的に繋げられる力を持たない。研究ならボトムアップの視点から文法の細分化が必要かもしれないが、学習に関してはトップダウンの視点も軽視してはならない。全体像を把握した上で、どの箇所のポイントについて学習しているのかを理解できれば語学の学習がより一層捗るからである（劉2012c）。なお、筆者は、中国語教育に限らず、日本語教育においても、高いレベルの語学力を身につけるために、初級段階からの体系的な習得を重要視している（劉2012a）。

（5）中国語では「祈使」「願望」ともいう。

（6）本稿で用いる「階層」は野田（2015）等で扱われている「階層」とは異なる概念である。

（7）2回使用を含む。

（8）佐伯・山内（1983：66）の「節」（山田文法・時枝文法の「句」に近い概念である。「言い切りにすれば文になり得る存在」と異なる点を注意されたい。なぜならば「名詞述語文」を除く必要があるためである。筆者は中国語に関してはいわゆる名詞述語文を認めない立場である。詳細は劉（2011：142）を参照されたい。また学校文法における「一個の自立語とその後に承接する0個以上の付属語から構成される文節」の「文節」とも別物である。

（9）機械的に日本語を中国語に置き換えるだけではなく、文構造モデルを用いることで同じ日本語が複数の中国語に訳すことができることを示すために、佐伯・山内(1983)にあった「待っていた」を「待っている」に改めて説明を行う。

(10) 本構造における主語と主題の扱い方、また周辺的な主題提示については更なる考察を要する。今後の課題とする。

(11) このほか「一語文」「箱入れ型」「鎖型」などによる複合体を「複合型」と区分する。「複合型」も文構造モデルを２回以上使用するものであり、「多回文」に区分される。

(12) 中国語の場合、連接語がなくても文構造モデル同士の意味上の接続関係が成り立つ。例えば、用例49がそれである。

(13) 意味による連接語の詳細な区分については鳥井（2005）がある。

(14) このほか、「連接語＋連接語なし」と「連接語なし＋連接語」の組み合わせもある。

【参考文献】

浅川哲也・竹部歩美（2014)『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう
庵功雄ほか（2001)『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
内田賢徳（1975)「形式副詞－副詞句の形相－」『国語国文』42－12
加藤晴子（2009)「中国語の文頭成分」『東京外国語大学論集』79
菊地康人（2010)「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法－『XはYがZ』文と『YがZ』句」『日本語文法』10－2、日本語文法学会
佐伯哲夫・山内洋一郎編（1983)『国語概説』和泉書院
佐藤富士雄（2000)「主語、主題研究と中国語教育」『中央大学論集』21
澤田浩子・中川正之（2004)「中国語における語順と主題化―主題化とその周辺の概念を中心に―」益岡隆志編『主題の対照』(シリーズ言語対照5巻)、くろしお出版
朱徳熙（1995)『文法講義　朱徳熙教授の中国語文法要説』(杉村博文・木村英樹訳)、白帝社
時枝誠記（1941)『国語学原論』岩波書店
時枝誠記（1950)『日本文法口語篇』岩波書店
鳥井克之（2005)『中国語教学文法概論』、関西大学出版部
野田尚史（2015)「文の階層構造から見た現代日本語の接続表現」『国語と国文学』92－4
堀川智也（2012)『日本語の「主題」』ひつじ書房
益岡隆志（1997)『複文』くろしお出版
益岡隆志（2004)「日本語の主題―叙述の類型の観点から―」『主題の対照』(シリーズ言語対照５巻)、くろしお出版
益岡隆志（2012)「属性叙述と主題標識」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版
益岡隆志・大島資生・橋本修編 (2014)『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
益岡隆志・野田尚史・沼田善子編（1995)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
丸尾誠（2010)『基礎から発展まで よくわかる中国語文法』アスク出版

村木新次郎（2007)「日本語の節の類型」『同志社女子大學學術研究年報』58、同志社女子大学
望月圭子（1999)「『は』と『が』：中国語を母語とする学習者への教授法」『東京外国語大学百年記念論文集（別冊)』
山田孝雄（1908)『日本文法論』宝文館
山田孝雄（1936)『日本文法論概論』宝文館
劉月華ほか（1996)『現代中国語文法総覧』(片山博美ほか訳）くろしお出版
刘月**华**等（2001)《**实**用**现**代**汉语语**法（增**订**本)》商**务**印**书馆**
劉志偉（2008)「日本人の中国語勉学に関する小考（続)」『かりん』創刊号、京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館
劉志偉（2011a)「中国語における文の中核的な述語に先行する要素の配置について」『類型学研究』3、類型学研究会
劉志偉（2011b)「日中構文の相違点から考える新しい中国語の学習方法―使役表現の場合―」『対照言語研究』21、海山文化研究所
劉志偉（2012a)「初級における活用の学習について―日本語学習経験者の視点から提案する説明方法―」『日本語研究』32 、首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
劉志偉（2012b)「中国語の把構文の習得について」『歴史文化社会論講座紀要』9、京都大学大学院人間・環境学研究科
劉志偉（2012c)「中国語の学習を考える―日本語母語話者の場合―」『人間フォーラム』30、京都大学大学院人間・環境学研究科
劉志偉（2013a)「日中構文の相違点から考える中国語受身表現の説明方法」『人文学報（日本語教育)』473、首都大学東京人文科学研究科
劉志偉（2013b)「日本語の受身表現と使役表現の連続性をめぐって―中国語との対訳から―」『日中言語対照研究論集』15、日中対照言語学会
劉志偉（2015)「第８章　学習者から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之編『文法シラバスの作成を科学にする』(現場に役立つ日本語教育研究シリーズ　第1巻)、くろしお出版
渡邉登紀・劉志偉（2015)「日本語の「名詞＋助詞」と対照させた中国語の「介詞＋名詞」の学習法―「視覚的」な中国語語順学習の方法の開発の一環として―」『歴史文化社会論講座紀要』12、京都大学大学院人間・環境学研究科

（りゅう・しい　首都大学東京）